

# 疑問詞疑問文と終助詞ゾ

—中世以降のゾの脱落を中心に—

竹村 明日香

## 1 問題の所在

中世日本語の疑問詞疑問文 (Wh-question) は、〈問い〉〈疑い〉〈反語〉という発話行為の差により表現形式が異なることが知られている。例えば、柳田 (1985) によると、『天草版伊曾保物語』の疑問詞疑問文ではそれら三つの発話行為が以下 (1a-c) のように異なっており、中でも〈問い〉は (1a) のように終助詞ゾを置く形式が一般的であることが指摘されている<sup>1</sup>。(2) にその一例を挙げる (以下、下線は稿者注)。

- (1) a. 〈問い〉 疑問詞……ゾ。 疑問詞。 疑問詞カ…。  
 b. 〈疑い〉 疑問詞……カ 疑問詞……ゾ。  
 c. 〈反語〉 疑問詞 (…)カ…ゾ。 疑問詞……ゾ。 疑問詞カ……カ。他  
 (柳田 1985 : 121-123)

- (2) 「蠅めはどこに居るぞ (doconi voruzo)」と言へば […]」  
 (『天草版伊曾保物語』 484 頁)

しかし、こうした〈問い〉における終助詞ゾは、中世末期から近世にかけて次の (3) (4) のように脱落する例が増加する。

- (3) (響)「いやそちは、今はどちへいた」 (『虎明本狂言集』「こひ響」上、369)  
 (4) (大名)「やれ何事をする、ざれ事か」 (『虎明本狂言集』「こぶうり」上、287)

先行研究においてこれらのゾの脱落は、体言述語文 (例：船賃は何ぢや) の方から生じ、徐々に用言述語文 (例：清盛の嫡子をば何と言うたぞ) へと拡大していったことが明らかにされている (外山 1957)。前者の体言述語文については、ゾから助動詞チャへの交替によって脱落が進んだことが指摘されているが (外山同前)、後者の用言述語文に関しては脱落要因に様々な解釈があり (小林 1996、矢島 1997 他)、未だ統一した見解が得られていない。別の語形への交替という形でなく脱落が進行したのだとすれば、そこにはどのような

<sup>1</sup> 中世日本語の疑問詞疑問文の〈問い〉において「疑問詞一ゾ」が一般的な形式であることは、山口 (1990)、磯部 (1992) などにも指摘がある。

要因が働いたのであろうか。

本稿ではこの疑問点を解消するために、従来注目されてこなかった発話行為とゾの脱落の関連性に着目して分析を行う。具体的には以下の二点の指摘を行う。

- ① 疑問詞疑問文で、〈問い〉の形式を取っていても、聞き手への問いかけ性が弱く、なおかつ聞き手からの解答を要求しない発話行為であるほどゾが脱落しやすい。
- ② ズを脱落させた疑問詞疑問文は、その諸特徴から、現代語でのノダ文にならない疑問詞疑問文にほぼ相当すると考えられる。

以下、2 では先行研究を概観し、ゾの脱落する疑問詞疑問文と、現代語でのノダ文にならない疑問文に共通点があることを示す。3 では調査資料と調査方法を示し、4 ではゾを脱落させやすい疑問詞疑問文が〈自問〉〈反語〉などの特定の発話行為に偏ることを示す。そして5 では、ゾを脱落させやすい疑問文と問いかけ性の弱い疑問文には関連性があることを示す。6 はまとめである。

## 2 先行研究

### 2.1 終助詞ゾを脱落させる疑問詞疑問文——中世・近世——

本節では、疑問詞疑問文の終助詞ゾの脱落に関する重要な論考を二点挙げる。

まず外山（1957）では、中世・近世期資料の網羅的な調査の結果、終助詞ゾには二類があり、(5b) のような「指定判断（叙述）と相手へのもちかけ（陳述）の働きとを持つ」第二類のゾが先に消滅し、それに続いて (5a) のような「相手へのもちかけ（陳述）の働きを持つ」第一類のゾが脱落したと指摘している。

(5) a. して清盛の嫡子をば何と言うたぞ。 [第一類]（天草平家、巻一、13）

b. いつの間に変りはてた御心ぞ？ [第二類]（天草平家、巻三、184）

（外山 1957 : 39）

即ち、(5b) の体言述語文の終助詞ゾが新興の助動詞<sup>2</sup>に代替する形で脱落し始め、それが (5a) の用言述語文にも影響し、脱落が一般化するに至ったとみる解釈である。この脱落過程については小林（1996）矢島（1997）でも追認されており、本稿の立場としても異論はない。しかし一方で外山は脱落要因に他の理由も挙げており、例えば「是はいかなこと」のような例は慣用的表現であるが故の脱落であり（pp. 42-43）、また、敬意の高い表現ほどゾの脱落が多いとするなど（pp. 43-44）、説明に一貫性がない。こうした一見例外的なゾの脱落にも統一した説明を与える事が必要であると考えられる。

一方、小林（1996）は、大蔵虎光本狂言集（1817年書写）の脱落例を、文型A～Fに分類し、その脱落の様相を詳細に報告している。ここでは文型の別は省略して、「ゾの脱落が多い」と示された例を以下（6）に示す。

- (6) a. 「疑問語+ヂャ」、「疑問語+（体言）+ヂャ」（p. 271）  
 （例）「何者ぢや」（朝比奈）、「[…] 何とする物ぢや」（節分）
- b. 〈何をするんだ！〉というような感動詞的な用法（pp. 275-276）  
 （例）シテ「何とする 太郎「是が目近で御座ル シテ「何とする （目近）
- c. 「独白形で自問する用法」、「反語表現」（p. 277）  
 （例）遙々間に（問にハ）戻られまひが何と致ふ （末広がり）  
 はて肝をつぶさいで何とせふ （骨河）

注目されるのは、外山（1957）が指摘したような体言述語文の中でも（6a）のように疑問詞が述語に来る場合に脱落が多いこと、また（6b）のような詰問調の感動詞的用法、そして（6c）のような聞き手からの解答を求めない「自問」と「反語」にもゾの脱落が多いことが指摘されている点である。その一方で、ゾを積極的に用いる例は次の（7）のように相手に直接問いかける場面が中心であり、「自らの案を提示した上で相手の見解を求める場合には、相手に対してもちかける気持ちが特に強く現れやすく、『ゾ』を必要とする度合いが強まるのであろう。」（p. 277）と述べ、ゾには聞き手へ「持ちかける」働きが関与していることを示唆している。

- (7) 相手に直接問いかける場面では、積極的に『ゾ』を使用（p. 272）  
 （例）「何事で御座ルぞ」（末広がり）

以上をまとめると、ゾの脱落は、体言述語文の中でも述語に疑問詞をとるもの（6a）の他、詰問調の疑問文（6b）、そして聞き手からの解答を求めない〈自問〉や〈反語〉（6c）に多いことが窺える。こうした例を現代語と対照させると、終助詞ゾを脱落させる疑問詞疑問文は、現代語での「ノダ文（ノカ）にならない疑問詞疑問文」の特徴と重なるところがある。

そこで次節では現代語でのノダ文にならない疑問詞疑問文の特徴を挙げ、上記の中近世における終助詞ゾの脱落する疑問詞疑問文とどの程度相似があるかを検討する。

## 2.2 ノダ文にならない疑問詞疑問文——現代——

ノダ文に関しては既に多くの論考があるが、ここでは疑問文とノダの関係を示した田野村（1990）、野田（1995）（1997）を中心に取り上げる。

まず田野村 (1990) はノダの意味特性に「承前性」「既定性」「披瀝性」「特立性」の 4 つを挙げた上で、ノダ文にならない疑問文<sup>2</sup>には、「既定性」と「披瀝性」の二つの制約が働いているとする。

「既定性」による制約 (pp. 55-60) とは、まだ決まっていない (即ち既定でない) ことを尋ねる場合には、ノダ文にならないということである。よって相手が既に知っている事柄や既定の内心などを尋ねる場合はノダ文の疑問文が使用可能なのに対し、考慮の上での返答を求める場合 (8a) や、その場で相談を持ち掛けて判断を問う場合 (8b)、勧誘・依頼の場合 (8c) など、聞き手の解答がいまだ定まっていないものを尋ねる場合には、ノダ文の疑問文にならないと指摘する。

(8) a. 聞き手に考慮の上での返答を求める時

株で一儲けする気は {ないか / ?ないのか} ね?

b. 相談を持ちかける時 きょうはどこへ {行く / 行くの<sup>3</sup>} ?

c. 勧誘や依頼 あなたも一緒に行って {みませんか / ?みないんですか} ?

もう一つの「披瀝性」による制約とは、初めから回答が容易・解答が明らかなもの (即ち、披瀝性がないもの) にはノダは用いないという制約である。この披瀝性とは「話し手、もしくは、ほかの誰かが、披瀝という行為を行うという意味では必ずしもな」く (田野村 1990 : 14、注 4)、「「のダ」を含む文においては、披瀝されなければすべての者には知りたいようなことがらが問題とされるとい

(9) a. 相手が容易に答えを出せる時

今日は {何曜日ですか / ?何曜日なんですか} ?

b. 反語 そんな残酷なことが私の口から {言えますか / ?言えるんですか} ?

(9b) の反語では、「残酷なことが自分の口から言える」ことが話し手にとっては明白な誤りであるため、披瀝性がなく、ノダ文の疑問文にならないと解釈されている。

他方、野田 (1995) (1997) では、疑問語質問文 (本稿での疑問詞疑問文) に現れるノダを、スコープとモーダルのノダに分けて観察し、以下 (10) の通りノダにならない例を示している。要約すると、ノダが不要となるのは、「～は [疑問語] ですか」のように疑問語

<sup>2</sup> 正しくは「ノカにならない疑問文」とするべきだが、ノダ文との関連性を示すために以下この表現を用いる。

<sup>3</sup> 「行くの？」も表現可能ではあるが、この場合は「どこに行くかを聞き手がすでに決めている (と話し手が考えている) という含みがある」 (田野村 1990 : 56-57) 場合であり、行き場所が既定である時にのみ使用が限られている。

がフォーカスになる場合(10a)、その場での判断を問う場合(10b)、クイズ型の疑問文(10c)、警察の尋問などのような詰問調の質問(10d)や反語の場合(10e)であるとする。

- (10) a. 差出人は誰ですか? 〈疑問語がフォーカス〉  
 b. これ食べていい? 〈その場での判断〉  
 c. (クイズで) 次のオリンピックは、どこで開催されますか? 〈クイズ型〉  
 d. 何故黙ってた? 〈反語〉  
 e. 話してもみないで、なぜわかる? 〈詰問〉

こうしたノダが不要の質問文に対し、反対に、「なぜ」「どうして」といった理由を尋ねる疑問詞疑問文にはノダが必須であることも指摘されている(野田 1995: 215)。

以上の論考に加え、金水(2012)(2013)では、疑念とノダの関連性からノダにならない疑問詞疑問文を分類する。話し手が命題に疑念を持っている場合、疑念の焦点を示すため卓立焦点構文(ノダ文)を用いられるが、話し手の疑念と無関係な構文では、ノダが不要となるという主張である。それには、以下の通り、反語・詰問調(11a)、申し出・依頼(11b)、業務的疑問文(11c)、クイズ・ゲーム文(11d)などが挙げられている。

- (11) a. 反語・詰問: なぜもっと早く起きない。  
 b. 申し出・依頼: 窓を開けましょうか?  
 c. 業務的疑問文: (タクシー) どちらにいらっしゃいますか?  
 (寿司屋) 何から握りましょう。  
 d. クイズ・ゲーム: (カードを取らせて) なぜそのカードを取りましたか?

以上の諸説を概観すると、現代語のノダにならない疑問詞疑問文は、中世・近世のゾを脱落させる疑問詞疑問文と重複する部分があることがわかる。野田が指摘する(10a)の疑問語が述語にくる場合は小林が挙げる(6a)の例に相当し、田野村らが指摘する反語、詰問調にノダが現れないという点は、小林が指摘する(6b)(6c)と共通する。ここから推測すると、中世・近世の疑問詞疑問文における終助詞ゾは、現代語のノダに等しい働きがあると仮定できるものと思われる。

しかし先行研究では基本的に聞き手からの解答があることを想定した質問文を中心に分類しており、聞き手からの解答(情報)を求めない(12)のような聞き返しや、(13)のような呼びかけへの応答の例は考慮に入れていない。

- (12) 「実は借金があるんだ」(聞こえていても)「今、なんて言った?」  
 (13) 「ねえ、ちょっと」「何ですか?」

これらも疑問詞を伴う疑問文であり、ノダが現れないことを考えると、こうした例も含めて、現代語及び中世・近世日本語でのノダ／ゾの脱落する疑問詞疑問文を比較・検討する必要があると思われる。

よって以下では、まず中世～近世期資料を中心に (12) (13) のような例も含めた疑問詞疑問文を調査する。

### 3 調査資料と調査方法

#### 3.1 調査資料

調査資料には、中世期資料として古活字本『毛詩抄』（全 20 巻、清家文庫本）と『虎明本狂言集』（大名狂言類～万集類の台詞部分）を用いた。抄物は講義体の文体であるため発話行為との関連性は見出しがたいが、狂言との差異を確認するため使用した。近世期資料としては、近松世話物浄瑠璃（10 作品、作品名は稿末記載）を用いた。

#### 3.2 調査方法

主節・従属節を問わず、疑問詞と終助詞ゾが共に用いられている疑問詞疑問文を採集した。比較を行うため、係助詞・終助詞のカ、ヤ、ヤラを含む例も併せて採集している。なお係助詞のゾも計量調査したが、考察には含めていない。

それらの用例を、発話行為の別に従って以下 (14) の通り分類した。分類には南 (1985)、仁田 (1991)、安達 (2002) 等を参照した。発話行為に収まらない特定の表現形式は「」に入れて表中に示した。なお以下、問い掛ける側は「話し手」、解答する側は「聞き手」と表現する。

- (14) a. **問いかけ**：聞き手が存在し、話し手が聞き手に疑問詞部分に対する解答（情報）を求める。
- b. **反語**：疑問表現の形式を取っているが、話し手の判断を主張し、それへの確認・同意を含む。
- c. **詰問**：尋問や言い争いなどの場面で、話し手が聞き手からの返答を許さない形で問い掛ける。
- d. **応答**：呼びかけに対して疑問詞を用いた形で応答をする<sup>4</sup>。

(例) 山伏「なふ太郎 太郎「何事ござる

<sup>4</sup> 南 (1985)、仁田 (1991) を初めとして、(14d) (14e) の形式は「問いかけ」の類に分類されることが多いが、本稿では「応答」「聞き返し」に分類する。問い掛けてはいてもその疑問詞部分に対する情報を聞き手から要求しておらず、一般的な「問いかけ」とは異なると判断するためである。

e. 聞き返し：相手の発話が了解できないことを、疑問表現で聞き返す。

(例) 仲人「しかとさやうにきひたが 聳 「何事をいはします

## 4 調査結果

### 4.1 中世：古活字本『毛詩抄』

【表 1】は古活字本『毛詩抄』における疑問詞疑問文の全例、【表 2】は「疑問詞一ゾ」の発話行為ごとの分類、【表 3】は「疑問詞一φ<sup>5</sup>」の「φ」に相当する文末の分類である。

【表 1】疑問詞疑問文全例

表現形式	用例数 (%)
疑問詞一ゾ	547 (71.6)
疑問詞一φ※	49 (6.4)
疑問詞ゾ	47 (6.2)
疑問詞カーゾ	54 (7.1)
疑問詞カーφ	33 (4.3)
疑問詞一ヤラ	31 (4.0)
疑問詞一カ	1 (0.1)
疑問詞ゾーヤ	1 (0.1)
疑問詞ヤラーゾ	1 (0.1)
疑問詞カーカ	—
疑問詞ゾーカ	—
合計	764 (99.9)

【表 2】「疑問詞一ゾ」

発話行為	用例数 (%)
問いかけ	302 (55.2)
「なれば」	190 (34.7)
自問	37 (6.8)
反語	12 (2.2)
「ぢや程に」	4 (0.7)
その他	2 (0.4)
合計	547 (100)

【表 3】「疑問詞一φ」

末尾	用例数 (%)
一ウ・ウズ	25 (51.0)
連体形終止	11 (22.0)
体言	7 (14.3)
断定ヂヤ	4 (8.2)
他 (マイなど)	2 (4.1)
合計	49 (100)

【表 1】の通り、本資料では「疑問詞一ゾ」が疑問詞疑問文の 71%を占めている。これらを発話行為別に分類すると、【表 2】の通り、〈問いかけ〉が約半数であることがわかる。

※「疑問詞φ」（誰ぢや）も含む

抄物という講義体の資料的性質上、原典漢文（『毛詩』）の疑問詞疑問文をそのまま口語訳したもの（15a）や、解釈の疑問点を聞き手に直接問いかけるもの（15b）が多く見受けられる。また（16）の通り「疑問詞一ゾなれば」の形式で理由を表す従属節に用いる例も 30%強あり、これらは抄物における疑問詞疑問文を特徴づける一つとなっている。

(15) a. 是は併ら天命ぢや。何とした事にえすてぬぞ。【原文：天實爲之。謂之何哉。

【天の實に爲るなり、謂むること何ぞや】（巻二、p. 206）

b. 王者の風ならば、なぜに国風へ入たぞ。雅へこそ入るべけれ。（巻一、p. 24）

(16) 何事を作たぞなれば、幽公を刺て作たぞ。（巻七、142）

一方で、「疑問詞一φ」は全体の 1 割にも満たない。これらは【表 3】の通り、文末にモダリティの「ウ」「ウズ」が来る例が半数（51.0%）を占める。これらには「～と思ふ」が後接しやすいことから、心中での〈自問〉を表すものにはとりわけ「疑問詞一φ」が用い

<sup>5</sup> 以下、「φ」は、終助詞・係助詞ゾ・ヤ・カのいずれかが存在しないことを示す。

られやすかったと考えられる<sup>6</sup>。

- (17) a. さて何とせうと思うてあのやうな悪事をばせらるゝぞ。(巻三、p. 231)  
 b. 母のいられたらば、いかに悦喜せられうずらうと思ふ程に、悠々と思ができたぞ。(巻六、p. 137)  
 c. 我何たる時に生て、生じやうが悪て、此うきめにはあうらうと云心ぞ。  
 (巻一二、p. 119)

全体として、抄物では「疑問詞一ゾ」が優勢であること、そして資料的性質により〈問いかけ〉や「なれば」を用いた疑問詞疑問文が大方を占めるものの、ウ・ウズのようなモダリティを取るような〈自問〉にゾの脱落例が偏る傾向にあることが確認できる。

#### 4. 2 中世末期：『虎明本狂言集』

【表 4】は『虎明本狂言集』における疑問詞疑問文の全例、【表 5】は「疑問詞一ゾ」の発話行為別の分類、【表 6】は「疑問詞一φ」の発話行為別の分類である。

表現形式	用例数(%)
疑問詞一ゾ	732 (65.8)
疑問詞一φ※	156 (14.0)
疑問詞ゾ。	126 (11.3)
疑問詞一ヤラ	30 (2.7)
疑問詞ゾーカ	24 (2.1)
疑問詞カーφ	21 (1.9)
疑問詞一カ	14 (1.3)
疑問詞ゾー。	4 (0.4)
疑問詞カーゾ	4 (0.4)
疑問詞カーカ	1 (0.1)
合計	1112 (100)

解答	発話行為	用例数(%)
要	問いかけ	503 (68.7)
不要 (218)	反語	49 (6.7)
	自問	104 (14.2)
	詰問	10 (1.4)
	応答	28 (3.8)
	間接疑問文 <sup>7</sup>	15 (2.0)
	聞き返し	12 (1.6)
/	引用	9 (1.3)
	他 (和歌等)	2 (0.3)
	合計	732 (100)

解答	発話行為	用例数(%)
要	問いかけ	58 (34.7)
不要 (93)	反語	27 (16.2)
	自問	23 (13.8)
	詰問	17 (10.2)
	応答	11 (6.6)
	間接疑問文	8 (4.8)
	聞き返し	7 (4.2)
/	引用	11 (6.6)
	他 (和歌等)	5 (3.0)
	合計	167 (100)

※「疑問詞φ」(誰ぢや)も含む

【表 4】の通り、『毛詩抄』と同じく「疑問詞一ゾ」が優勢であるが、『毛詩抄』と比べると、ゾを脱落させた「疑問詞一φ」が微増している(6.4%→14.0%)。また【表 5】【表 6】の通り、〈問いかけ〉は、ゾを脱落させない場合も、させた場合のいずれにも最も多い。その〈問いかけ〉の中でも、体言の疑問詞が述語にくる例は、「疑問詞一φ」では53例中

<sup>6</sup> 磯部(1990)によると『源氏物語』の疑問詞疑問文ではム・ケム・ラムのモダリティと終助詞ゾが共起しにくいと指摘がある。中世のゾがウ・ウズと共起しにくいのは、中古の疑問文の影響による可能性も考えられる。

<sup>7</sup> 間接疑問文の例は「やれ\／あらたな事じやが、何とあらふぞしらぬよ」(下「いぐい」pp. 141-142)のような例である。「何とあらふぞ」が主節の可能性も考えられるが、今回は間接疑問文とした。

15 例 (28%) あり、外山 (1957) が指摘した通り、この頃から疑問詞を述語にとる体言述語文ではゾの脱落が生じつつあることが確認できる。

(18) (船頭)「せんちんは何ぢや (薩摩のかみ、中、p. 314)

(19) (太郎冠者)「何事じや (文荷、中、p. 111)

しかし、【表 5】【表 6】で注意されるのは、「聞き手からの解答 (情報) を要求するか否か」という観点で発話行為を分類すると、両者で異なりが現れる点である。【表 5】の疑問詞一ゾの場合、解答を要求する〈問いかけ〉503 例の方が、解答を要求しない〈反語〉〈自問〉〈詰問〉等の総数 218 例を大きく上回る。一方、【表 6】の「疑問詞一φ」では対照的に、解答を求める〈問いかけ〉53 例よりも、解答を求めない〈反語〉等の総数 93 例の方が数量的に上回る。

すなわち、終助詞ゾを脱落させる疑問詞疑問文は、総じて聞き手に解答を要求しない用例に多く生じていることが確認されるのである。以下にそれらの例を挙げる。

(20) 〈反語〉

a. (何某)「やい\ / いつもうばが所へ、としとる物をやるに、なぜにやらなんだ、いそひでやれ (よねいち、下、p. 98)

b. (後家)「わらはがやうな者を、【補——後家として】たがそひませう、そのうへいきたうもござらぬ (時、下、p. 223)

(21) 〈自問〉

a. (大名)「言語道断めんぼくうしなふた、きやつが心中はづかしひよ、なにとしてよからふな (しうくがらかさ、上、p. 210)

b. (次郎冠者)「[…] せいばいをめされたら、何とせう、まつあれへまいつて太郎くわじやに申きかせふ、[…] (よびこゑ、上、p. 319)

(22) 〈詰問〉

a. (妻)「やいわ男、花ごがなんといふた、なふはらたちやな、[…]  
(はなご、中、p. 216)

b. (羯鼓売)「某がとうきて有に、何とてそれにいる、そちへのけ  
(なべやつばち、上、p. 128)

(23) 〈応答〉

a. (孫一)「なふきかしますか (孫二)「何事でおじやる  
(やくすい、上、p. 110)

b. (告げ手)「[…] 申ござるか 女「何事でおじやる  
(ひげやぐら、中、p. 274)

(24) 〈聞き返し〉

仲人「しかとさやうにきひたが 聳「何事をいはします (こひ聳、上、p. 371)

上記 (20-24) の例では、話し手が聞き手から疑問詞部分に対する解答 (情報) を要求していないという共通点がある。反対に、話し手が、聞き手の既に把握している解答を得たい場合には、「疑問詞一ゾ」が用いられる。こうした例には、聞き手の解答 (.....部分) が後続する場合が多く見られる。

(25) (越前) 「おそうしゃはどこもとで御ざるぞ (加賀) 「つつとおくに御ざる  
(餅酒、上、44)

(26) (大名) 「[...] 此は何と申川にて御ざるぞ 入間 「此川はいるま川と申  
(入間川、上、162)

以上から、中世末期の会話体である『虎明本狂言集』では、終助詞ゾの脱落が、疑問詞を述語にとる体言述語文のほか、聞き手からの解答 (情報) を要求しない〈反語〉〈自問〉〈詰問〉等に多く偏るという傾向を認めることができる。

4. 3 近世期：近松世話物浄瑠璃

【表 7】は疑問詞疑問文の全例、【表 8】は「疑問詞一ゾ」の発話行為別の分類、【表 9】は「疑問詞一φ」の発話行為別の分類である。

【表 7】疑問詞疑問文全例

表現形式	用例数 (%)
疑問詞一φ※	173 (59.4)
疑問詞一ゾ	51 (17.4)
疑問詞一ゾ	31 (10.7)
疑問詞一ヤラ	22 (7.6)
疑問詞一ゾ一カ	6 (2.1)
疑問詞一カ一φ	6 (2.1)
疑問詞一カ	2 (0.7)
疑問詞一カ一ゾ	2 (0.7)
疑問詞一カ一カ	— (0)
合計	293 (100)

※「死ぬる身に何の望み [ガアロウカ]」のように省略による体言止めの例は除外。

【表 8】「疑問詞一ゾ」

解答	発話行為	用例 (%)
要 (22)	問いかけ	29 (56.9)
	反語	12 (23.5)
	自問	9 (17.6)
	詰問	1 (2.0)
	疑念表出	—
	間接疑問文	—
	応答	—
不要	聞き返し	—
	引用	—
	その他	—
	合計	51 (100)

【表 9】「疑問詞一φ」

解答	発話行為	用例 (%)
要 (90)	問いかけ	80 (45.7)
	反語	36 (20.8)
	自問	24 (13.9)
	詰問	18 (10.4)
	疑念表出	10 (5.8)
	間接疑問文	1 (0.6)
	応答	—
不要	聞き返し	—
	引用	—
	その他	4 (2.3)
	合計	173 (100)

【表 7】の通り、「疑問詞一φ」が「疑問詞一ゾ」を上回り、全体の半数を超えるようになる。「疑問詞一φ」の内訳は【表 9】の通り、〈問いかけ〉の例が最も多い。その約 32%

(26例)は「(Xは) [疑問詞] ギャ」というような疑問詞を述語にとる形式である (27a-b)<sup>8</sup>。それに続いて、〈反語〉(28)、〈自問〉(29)、〈詰問〉(30)の例も、中世から引き続ぎズを脱落させた例が多く見られる。

(27) a. やい三太そりや何ぢや。(重井筒、p. 67)

b. 北の町からいかつげに来るは誰ぢや。ヤア、中の島の八右衛門。

(冥途の飛脚、p. 165)

(28) 〈反語〉

今の治兵衛が四つ三貫匁の才覚。打ちみしゃいでもどこから出る。(天網島、p. 374)

(29) 〈自問〉

こっちは京の方あの山は闇か。但し比叡山かどこへ行たらば逃れうと。眼も迷ひうろたへ (油地獄、p. 398)

(30) 〈詰問〉

大だはけめそれを誰が吟味する。サア来い裏町を尋ねて見ん。(天網島、p. 381)

上記の通り、近世期資料の「疑問詞一φ」は『虎明本狂言集』と同じく〈反語〉〈自問〉〈詰問〉の順に用例が多いが、近世には〈疑念表出〉(仁田 1991)に相当する例も一定数現れる。疑念表出とは、「なんだ?故障か!?’のように、「出来た事態を十分に把握できていない、といった事態そのものへの疑念を表した文」(仁田 1991: 146)と定義されるものであり、これらは「〈疑いの文〉と同様、問いかけ性を必要としていない」(同上)。これらは自身の疑念を表すことを中心機能としており、聞き手へ情報要求が現れていない。

(31) 〈疑念表出〉

a. 〔徳兵衛〕 おぬしが擦した判が有る。[…]〔九平次〕 ム、ウ何ぢや判とはどれ見たい。  
(曾根崎、p. 25)

b. 〔女郎〕(※与兵衛様は) 是から直に曾根崎へ叶はぬ用とてござりんした。〔森右衛門〕 何ぢや曾根崎へ。南無三宝遅かった。(油地獄、p. 423)

こうした例とは反対に、聞き手から解答を要求する場合には次の通り、「疑問詞一ゾ」が使用される。これらには聞き手からの返答が後続する例が目立つ。

(32) 〔お乳人〕 して年はいくつ名は何といふぞ。〔三吉〕 年は今年十一。[…]名は自然生の三吉。(丹波、p. 96)

<sup>8</sup> 「Xは [疑問詞] ギャ」のように述語が疑問詞のものにゾがついた例もあるが、6例のみであった。  
立酒をお吉見付けてそりや何ぞ。忌々しい (油地獄、p. 412)

(33) こなさんどう思うてぞ。ム、其の覚悟極ればもう落付いた (丹波、p. 118)

(34) [...] やい文六。おのれ若年なれども [...] 何として源右衛門を疾くに討っては捨てざるぞ。いや我等も承り。家来どもに申付け彼が旅宿へ討手に遣し候へば。  
(堀川波鼓、p. 56)

以上の通り、近世においても聞き手への問いかけにより解答（情報）を要求しない疑問詞疑問文ほどゾの脱落が多く、反対に、聞き手からの解答を求める疑問詞疑問文ほどゾを脱落させにくいという対照的な様相が見られる。

## 5 〈問い〉と〈疑い〉

### 5.1 問いかけ性の有無

前節までにおいて、中世・近世語での終助詞ゾを脱落させる疑問詞疑問文は、〈反語〉〈自問〉〈詰問〉〈疑念表出〉といった、問いかけの表現形式は取っていても聞き手からの解答を要求しない発話行為に多いことが確認された。反対に、終助詞ゾを伴う疑問詞疑問文は、聞き手から疑問詞部分に関する解答（情報）を求める例が多いことも明らかになった。これらの特徴を踏まえると、従来分類されてきた〈問い〉と〈疑い〉は、どのような点を本質的な相違としているのかを再確認する必要があると考えられる。

現代語のモダリティ研究においては、問いと疑いには連続性があり、〈問いかけ〉から聞き手を想定した問いかけ性が欠落・希薄化すると〈疑い〉になることが指摘されている。例えば仁田（1991）は、疑問表現の諸タイプを独自のモダリティ分類である〈発話・伝達のモダリティ〉の中に位置付けてその差異を明示化している。発話状況として「積極的に聞き手の存在を前提とする」場合と「必ずしも聞き手の存在を前提としない」場合の両極を置き、それらの間に〈働きかけ〉〈問いかけ〉〈述べ立て〉〈表出〉という〈発話・伝達のモダリティ〉を立てる。疑問表現の諸タイプは、言語行為の別によりこれら4つのモダリティの中に位置づけられる（以下（36）参照<sup>9</sup>）。

その中でも、典型的な疑問表現は〈判断の問いかけ〉であるとし、以下（35a-c）のような成立条件を掲げる。

(35) 〈判断の問いかけ〉：

- a. 話し手に不明な点があって、判断の成立を断ずることができない。
- b. 聞き手がいて、話し手の不明な点を解決する情報を提供することができる<sup>10</sup>。

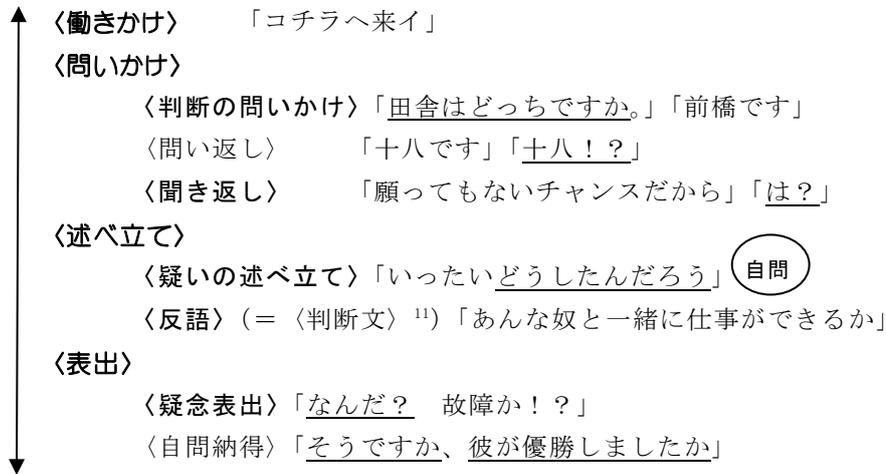
<sup>9</sup> 下の（36）は、仁田（1991：135-164）から本稿に關係する疑問表現を抜粋し、私に図示したものである。「ジャナイカ」形など本稿に直接關係しない疑問文の位置づけは省略している。

<sup>10</sup> （35b）は問いかけの言語行為が成功するための条件であって、クイズ式疑問文では必ずしも（35b）

c. 話し手が聞き手に不明な点を解決するための情報提供を求める。

(仁田 1991 : 137)

(36) 積極的に聞き手の存在を前提とする



※ ○ は稿者補。本稿での〈自問〉が〈疑いの述べ立て〉に相当することを示す。

疑問表現では、典型的な疑問表現である(35)の〈判断の問いかけ〉から問いかけ性(35c)が欠落・希薄化するほど、〈述べ立て〉〈表出〉という疑いを表す表現に傾く。例えば類似しているような〈問い返し〉と〈聞き返し〉であっても、「は?」のような〈聞き返し〉は、相手の言語表現としての発話そのものが了解できない場合に発せられるものであり、相手発話の不明部分を再度問い直す〈問い返し〉よりも、問いかけ性が弱く、疑念表出の色彩が濃い。このように、疑問表現から聞き手へ向けての問いかけ性が失われるほど、〈疑いの述べ立て〉(本稿での〈自問〉)、〈反語〉、〈疑念表出〉と、疑いの表現になっていくという段階性が説明されている。

安達(2002)においても同様に、「不確定性条件」に「問いかけ性条件」があるのが〈質問〉であり、「不確定性条件」しかないのが〈疑い〉であるとしている。

これらから判断すると、従来の〈問い〉とは問いかけ性を持ち、なおかつ聞き手からの情報提供を求める発話行為であり、他方、〈疑い〉とは、〈問い〉から問いかけ性を失って聞き手からの情報提供を要求しない発話行為であると理解される。

## 5.2 問いかけ性とゾの脱落の関連

前節5.1と、終助詞ゾが脱落する中世・近世の疑問詞疑問文の関連性について述べる。

を前提としていないことが指摘されている(仁田 1991 : 137)

<sup>11</sup> ただし、「反語表現の含む判断の主張、確認・同意の要求は、常に、一定、絶対であるというのではなく、様々な状況・文脈といった語用論的な条件のあり方によって、微妙に変化するものである。」

(p. 150) とあり、〈述べ立て〉から疑問表現の形式を取った〈働きかけ〉まで幅があるとする。

前述の通り、ゾの脱落は、〈問い〉の表現形式を取っていても、問いかけ性が弱く聞き手からの解答を求めない疑問詞疑問文を中心に生じていた<sup>12</sup>。ゾは、先行研究の指摘にもある通り、相手へのもちかけの働きを持つ終助詞である（外山 1957、小林 1994 他）。そのもちかけは、疑問詞と併用されることで問いかけの機能を持つ。疑問詞部分への解答を求める問いかけである。しかし、話し手自身の主張や疑念を表出するだけの〈反語〉〈自問〉〈詰問〉〈問い返し〉〈疑念表出〉といった言語行為では不明点を解決するための情報提供を聞き手から求めないため、聞き手への問いかけ性が弱く、そのためゾは他の文型よりも多くゾを脱落させたものと考えられる。

また、ゾを脱落させる疑問詞疑問文が現代語のノダ文にならない疑問文と重なるのは、ノダにいわゆる「説明」を行う機能（寺村 1984、田野村 1990 他）があることと関連すると考えられる。ノダの疑問文は、話し手が見たこと聞いたことに対する聞き手の説明を求めるのに用いられる（久野 1973、田野村 1990 も同様）。即ち、ノダはゾと同じく、聞き手からの情報提供を求める問いかけの性質を持つが故に、中近世期と同じく〈反語〉〈自問〉〈詰問〉などの解答を要求しない表現形式で欠落するものと推定される。

以上からすると、疑問詞疑問文の終助詞ゾは、現代語のノダに等しい機能（＝聞き手から説明を求める問いかけ性）を持っているために、ゾやノダが脱落する文型は一致するものが多いと考えられる。

### 5.3 近世の理由を求める疑問文におけるゾの脱落

最後に補足として、近世ではなぜ理由を求める疑問詞疑問文にゾの脱落が多いのかを説明する。野田（1995：215）は、現代語の「なぜ」「どうして」を伴う疑問詞疑問文ではノダが必須であると指摘しているが、近世期資料では、そのノダに相当するゾの脱落が目立つ。

(37) a. 小春を踏む足で。うろたへたおのれが根性をなぜ踏まぬ。（天網島、p. 366）

b. 二人の子供が目をさまし。大事の母様なぜ連れて行く祖父様め。

（天網島、p. 378）

しかしこうした近世の「なぜ」「どうして」を伴う疑問詞疑問文を観察すると、約半数（26例中 15例）が末尾に打消表現を伴う形であり、「なぜ～しないのか」という〈詰問〉になっていることがわかる。また、打消にならない例もほとんどが〈反語〉の例であり、話し手の主張を強調する表現になっている。

<sup>12</sup> 疑問詞を述語にとる体言述語文「～は〔疑問詞〕ぢや」は、疑問詞が疑問のスコープになることによってゾ（＝ノダ）を脱落させたものであると考えられる。よって、問いかけ性の有無とは無関係であるため、以下の考察からは除外する。

- (38) a. 左様なことをせんよりもおのれが額に傾城の娘と。なぜ看板は打ちをらぬと  
 齒切を。してぞ泣きけるが (五十年、p. 141)
- b. 男を立てる其方と見て詮方なう渡す金。さっぱりと請取って母の心を安めてた  
 も。包は解くに及ぶまじいらうて見ても五十両。どうしてたもる<sup>13</sup> と差出す  
 (冥途の飛脚、p. 167-168)

これらはいずれも相手がしなかったこと(理由)を一方的に責め立てる形となっている。聞き手に理由を尋ねて情報提供を求めるのではなく、相手への非難を一方的に押しつける表現であるために、問かけ性がなく、終助詞ゾが脱落しているものと考えられる。

## 6 まとめ

本稿では以下のことを述べた。

- (A) 中世末期以降、「疑問詞一ゾ」という疑問詞疑問文では終助詞ゾが脱落するようになる。それらは、現代日本語でのノダ文にならない疑問詞疑問文にほぼ相当する。
- (B) 終助詞ゾの脱落は、中世以降、〈反語〉〈自問〉〈詰問〉〈疑念表出〉といった発話行為から生じている。ゾは、聞き手からの情報提供を求める問かけ性の強い助詞であったため、話し手の主張・疑念等のみを表すこれらの表現では用いる必要がなく、いち早く脱落していったものと考えられる。
- (C) 現代語のノダを伴う疑問文は、聞き手からの説明を求める文に用いられる。中世日本語のゾも、聞き手からの情報提供(すなわち説明)を求める疑問文に用いられるために、両者でのゾやノダが脱落する疑問文の文型は共通するものと考えられる。

ただし、中世の終助詞ゾが完全に現代語のノダと一致する機能を持つとは断じがたく<sup>14</sup>、ゾとノダの関係性については今後更なる検討を要する。また近代以降、大阪方言では「ネン」「ネヤ」などのノダ相当の表現形式(野間 2013)が出現しており、それらとの関係性も問題となる。

これらの問題については今後の検討課題としたい。

<sup>13</sup> 脚注 35 「どうして下さるの意から転じて、これで文句があるかの意に用いる。」(p. 167) とある。

<sup>14</sup> 例えば現代語のノダは間接疑問文の従属節にも入るが(例: 太郎がいつ来るのか知らない)、終助詞ゾは、中近世日本語資料では間接疑問文の従属節に入っていると確定できる例がほとんどない。こうした相違も問題となる。

## 【参考文献】

- 安達太郎 (2002) 「第 5 章 質問と疑い」 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書 4 モダリティ』くろしお出版
- 磯部佳宏 (1990) 「中古和文の要説明疑問表現——『源氏物語』を資料として——」『日本文学研究』26
- (1992) 「『平家物語』の要説明疑問表現」辻村敏樹教授古稀記念論文集刊行会編『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』明治書院
- 金水敏 (2012) 「理由の疑問詞疑問文とスコープ表示について」近代語学会編『近代語研究』16、武蔵野書院
- (2013) 「日本語疑問文研究の課題」第一回「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究発表会発表レジュメ
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 小林賢次 (1996) 「大蔵虎光狂言集における疑問詞疑問文——終助詞「ゾ」を中心に——」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点下巻』明治書院
- 小林千草 (1994) 『中世のことばと資料』武蔵野書院
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I ——「のだ」の意味と用法——』和泉書院
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味第 II 巻』くろしお出版
- 外山映次 (1957) 「質問表現における文末助詞ゾについて——近世初期京阪語を資料として——」『国語学』31
- 野田春美 (1995) 「～ノカ？、～ノ？、～カ？、～φ？——質問文の文末の形——」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版
- (1997) 『「の（だ）の機能』くろしお出版
- 野間純平 (2013) 「大阪方言におけるノダ相当表現——ノヤからネンへの変遷に注目して——」『阪大日本語研究』25
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 南不二男 (1985) 「2 質問文の構造」水谷静夫編『朝倉日本語新講座 4 文法と意味 II』朝倉書店
- 矢島正浩 (1997) 「疑問詞疑問文における終助詞ゾの脱落——近世前・中期の狂言台本を資料として——」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院
- 柳田征司 (1985) 『室町時代の国語』東京堂出版
- 山口堯二 (1990) 『日本語疑問表現通史』明治書院

## 【調査資料】

- 毛詩抄：清原宣賢講述、倉石武四郎・小川環樹校訂 (1996) 『毛詩抄 詩経』全四巻、岩波書店

虎明本狂言集：池田廣司・北原保雄（1972-1983）『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇』上  
中下巻、表現社

近松世話物浄瑠璃：重友毅校注（1958）『近松浄瑠璃上』（日本古典文学大系 49）岩波書店  
より、「曾根崎心中」、「堀川波鼓」、「重井筒」、「丹波與作待夜の小室節」、「五十年忌歌念  
仏」、「冥途の飛脚」、「大経師昔暦」、「心中天の網島」、「女殺油地獄」、「心中宵庚申」。